令和８年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組

「品川区学力定着度調査」の趣旨

(1)学習指導要領に示された教科の目標や内容の実現状況を把握し、教育課程や指導方法等に関わる区の課題を明確にすることで、その充実・改善を図るとともに、区の教育施策に生かす。

(2)各学校は、教育課程や指導方法に関わる自校の課題・解決策を明確にするとともに、調査結果を経年で把握することで、児童・生徒一人一人の学力の向上を図る。

(3)区民に対し、区立学校における児童・生徒の学力等の状況について、広く理解を求める。

1　調 査 日　令和８年４月１４日（火）

2　調査対象　品川区立学校　第２～９学年の全児童・生徒

3　調査内容
教科に関する調査
→　調査の趣旨に基づき、学習指導要領に定める内容について、基礎・基本および活用の力を測る問題で構成

<第２・３学年>　国語、算数
<第４～５学年>　国語、社会、算数、理科
<第　６　学年>　国語、社会、算数、理科、英語
<第７～９学年>　国語、社会、数学、理科、英語

学校名　品川区立品川学園

品川区立品川学園

令和８年度　品川区学力定着度調査

第２学年～第４学年における分析と対策　　教科：国語

1.〔調査結果の概要〕

第２・３・４学年共に、目標値を全体的に上回った。またどの学年も情報の扱い方に関する事項については、全国平均を上回っている。一方で「書くこと」（漢字を書く・文章を書く）に関する問題の正答率が低い傾向にある。学年が上がるにつれ、身に付けるべき知識や技能の幅が広がり、学習の定着に差が出てきていると考えられる。漢字の読み書きの学習を繰り返し行い、確実に定着を図っていくことが必要である。無回答の児童や、正答率が 10～60%の児童に対して、学力向上のための指導の工夫をする必要がある。

2.〔各学年における主な分析と解説〕

学年	領域に関わる分析と解説
第２学年	全国平均を上回っており、ほとんどの領域で目標値を上回っている。問題別にみると、「説明文を読み取る」では、全国平均を１０％以上高く、「読むこと」の領域に関する力が高いことが分かる。しかし、「漢字を書く」では、全国平均を４．２％下回っている。漢字を書く力に関して、課題が見られる。
第３学年	すべての領域で目標値を上回っている。「情報の扱い方に関する事項」は全国平均より 10%を超えて上回っており、情報を扱う力は高いことが分かる。しかし、問題別に見ると「漢字を読む」では全国平均 3%、「お礼の手紙を書く」では全国平均を 2.5%下回っている。漢字を読んだり、文章を書いたりする学習に課題があると考えられる。
第４学年	すべての領域で目標値と全国平均を上回っている。「情報の扱い方に関する事項」は全国平均よりも 15%以上高く、情報を扱う力が高いことがわかる。また、活用に関する問題は目標値よりも約 14%高く、国語で身に着けた基礎的な力を活用する能力が高い。しかし、「漢字を書く」問題では、目標値で約８%低く、漢字を書く力に関しては課題がある。

3.〔各学年における主な課題と対策〕

学年	「重点的に指導を行う領域」に関わる分析と解説
第２学年	「漢字を書く」については、漢字を正確に書く力を高めるため、漢字の小テストで繰り返し指導を行っていく。また、学習のノートやワークシートでも、既習漢字を正しく書けるよう繰り返し指導していく。宿題では、「ことのは」を活用し、「とめ・はね・はらい」をより丁寧に指導するとともに、日記の宿題で日常的に既習漢字を使用して文章を書く習慣を身に付けさせる。
第３学年	「漢字を読む」については、日常の授業の中で音読させる機会を増やしたり、漢字テストを合格するまで繰り返し再テストを行ったりすることで、既習漢字の読み方の定着を図る。また、授業では「ことのは」を活用し、新出漢字の意味や熟語を丁寧に指導したり、ノートやワークシートに記述する活動を取り入れたりすることで、書く力を身に付けさせる。
第４学年	「漢字を書く」については、漢字テストをこまめに実施し、定着するまで再テストを実施する。また、「ことのは」を活用して、新出漢字を使った言葉を丁寧に指導することで、漢字を日常生活と関連付けて覚えられるように配慮する。授業では、既習漢字を使用する機会を多く設け、自然と漢字に親しめる環境を用意する。

4.〔全体のまとめ〕

第２学年から第４学年までは、ほとんど全ての領域で目標値を上回っていることから、基礎的な力は概ね身に付いていると考えられる。今後は、漢字の読み書きに関して、学力を伸ばしていくための指導の工夫が必要である。国語科の学習を含め、他教科でも文章を書く際に、既習漢字を正しく書けるよう繰り返し指導し、学力の定着を図っていく。

品川区立品川学園

令和８年度　品川区学力定着度調査

第５学年～第９学年における分析と対策　　教科：国語

1.〔調査結果の概要〕

すべての学年において、校内正答率が全国平均を上回っており、概ね良好な状況である。

2.〔各学年における主な分析と解説〕

学年	領域に関わる分析と解説
第５学年	全体的にはほとんどの領域で全国平均を上回っており、概ね良好な状況である。特に、漢字の読み問題は 97.5%、言葉の学習(ことわざ)は 92.4%、登場人物の気持ちを読み取る問題は 95%と全国平均を大きく上回る高い正答率であった。一方、漢字を書くことに関しては、全国平均を下回る結果が出ていることがわかった。また、相手や目的を意識して、伝えたいことの文章を書く問題も全国平均を下回っている。漢字の定着を図るとともに、書くことへの指導を丁寧に行う必要がある。
第６学年	各領域ともに全国平均を上回っており、概ね良好な状況である。漢字を書く問題に関しては、やや正答率が低く、十分に定着できていないことが分かった。また、文章を書く問題で、資料から読み取った事実を書く問題の校内正答率が 49.6%で全国正答率 51.8%を下回っていた。今後は漢字の書き取りや資料の読み取り等の定着を図ることが必要である。
第７学年	概ねどの領域でも全国平均を上回っており、良好な状況である。教科全体・基礎の区分・活用の区分に関しても区平均を上回っており、目標値や全国平均より高い正答率を出している。「漢字の読み」については平均を大きく上回るが、「漢字を書く」については目標値を上回ったが、区平均を 0.6%、全国平均を 1%下回る。「漢字の書き」「内容の聞き取り」のためのメモなど基礎の徹底は意識していく必要がある。
第８学年	概ね目標値を上回っており、良好な状況である。「言葉の特徴や使い方に関する事項」に関しては 60.9%と目標値・区平均・全国平均と比べ 5%弱下回る結果となった。「話すこと・聞くこと」に関しても 3.4%区平均を下回った。また、「読むこと」についても、区平均より 3.5%下回っている。「漢字の読み」については、区平均より、4.7%下回っており「漢字を書く」については区平均より 9.6%全国の平均より 11.4%下回る、漢字の読み書きの訓練等、基礎を徹底し、読書活動の強化など、語彙力の伸長を図る必要がある。
第９学年	各領域ともに全国平均を上回っている。特に、「文法・語句に関する事項」「説明的文章や文学的文章の内容を読み取る問題」では目標値を大きく上回っている。ただし、「我が国の言語文化に関する事項」「話すこと・聞くこと」の領域に関して区の平均正答率を少し下回っていた。また問題の内容別で見ると「漢字を書く」が目標値を少し下回っていた。学年の傾向としては、全体の正答率が80%を上回る生徒が35.2%いる反面、正答率が35%を下回る生徒が11.5%いる。そして正答率が低い生徒は記述問題の正答率が低い傾向にある。

3.〔各学年における主な課題と対策〕

学年	「重点的に指導を行う領域」に関わる分析と解説
第５学年	漢字の定着と作文に課題がある。週に 1 回小テストを実施したり、意図的にノートに文字を書く機会を増やし、学んだ文字を日常の中で活用できるようにする。文章を書くことに関しては、例文を提示したり、問題文の意図の読み取り方を重点的に指導することで改善を目指していく。
第６学年	漢字については、週１回小テストを行っている。しかし、一時的に書けていても、定着には至っていない様子がうかがえる。繰り返しテストなどを通して練習させるとともに、日頃の指導で平仮名ではなく漢字を使って書くよう指導していく。また、資料から読み取った事実を書くことについては、事実と意見を分けて読み取れるようにすること、また資料の読み取り方の指導を丁寧に行うようにする。
第７学年	「言葉の特徴や使い方に関する事項」と「読むこと」については、文章の読み取りを行う時間の中で、わからない言葉の意味や使い方を調べる時間を増やす。そこでの学びを活かして文章をまとめたり意見を書いたりする際、言葉の知識を増やすとともに正しい使い方を身に付けていく。多くの言葉に触れて、理解を深めるためにも、授業の中で継続して読む力を伸ばしていく。また、多くの文章に触れるため読書の機会を増やしていく。
第８学年	「言葉の特徴や使い方に関する事項」については、授業の中でも定着させられるよう、「漢字の読み書き」「文法・語句に関する事項」定着のための小テストなど機会や増やしていく。「話すこと・聞くこと」「読むこと」については授業内の話し合いを増やし、情報を受け入れて処理する力が身に付くようにする。作文や短文作成時に漢字を使う機会を増やし、国語辞典の活用で語彙力の伸長を図る。読書活動の強化を図り、様々なジャンルの文章に触れる機会を増やす。
第９学年	学力差があり、とくに記述問題など「活用」に関する問題を解く力の底上げが課題となっている。また、全体を通して漢字の書きに課題が見られた。ここから、作文に関してはテーマに合わせて書き方を明確化し、スモールステップで取り組むことで「苦手意識」を払拭できるように授業を展開する。また日々の漢字練習と小テストの習慣を続けることに加え、文章の中で漢字を使う機会を増やして語彙力と関連させて漢字を身につけさせていく。

4.〔全体のまとめ〕

すべての学年において、校内正答率が全国平均を上回っており、たいへん良好な状況である。区の定める目標値との比較においても、「基礎」・「活用」ともに、すべての学年で上回っている。ただ、内容や領域ごとに見ていくと、全国平均を下回っている項目もあり、今後の教育活動に活かしていく必要がある。 今後も授業での単元ごとの小テストや漢字のチェックテスト、S-Time を活用し、基礎の力を蓄えさせていく。

品川区立品川学園

令和８年度　品川区学力定着度調査

第４学年～第９学年における分析と対策　　教科：社会

1.〔調査結果の概要〕

ほとんどの学年において、「基礎」「活用」ともに校内正答率が目標値・全国平均を上回っており、概ね良好な状況である。

2.〔各学年における主な分析と解説〕

学年	領域に関わる分析と解説
第４学年	正答率はすべての領域で、「基礎」「活用」ともに、目標値・区平均・全国平均を上回っていた。
第５学年	正答率はほぼすべての「基礎」「活用」ともに、目標値・全国平均を上回っていた。しかし「活用」の正答率が前年の校内より約 8%減少している
第６学年	全国平均と比較して、全体の正答率は「基礎」の部分では 8.6pt、「活用」の部分では 6.1pt と全て上回る結果となった。また、目標値でも、全体の正答率は 9.1.pt、「基礎」の部分では 9.5pt、「活用」の部分では 8.4pt と大きく上回る結果となった。
第７学年	全体的に全国平均と比較して上回る結果になった。
第８学年	地理分野は概ねよくできていたが、歴史分野の正答率が低いので、歴史分野の復習が必要である。
第９学年	基礎の問題を中心に全国平均を上回るものがいくつか見られた。地理分野はやや下回ったので、地理分野の理解が不十分であるといえる。

3.〔各学年における主な課題と対策〕

学年	「重点的に指導を行う領域」に関わる分析と解説
第４学年	正答率はすべての領域で、「基礎」「活用」ともに、よくできていると言える。しかし、「生産や販売」の領域の、「店ではたらく人」では、正答率が目標値を下回っている。問題を正しく読み、解釈できるよう、授業内で理解したことを伝え合う場を設けていくようにする。
第５学年	資料をもとに記述する問題の正答率が低かったことから、資料集を活用したり、追加の資料の読み取りをしたりして、資料を読み取り、考察する機会を増やす。また、複数の資料の共通点を見出し、考察する機会も増やしていく。
第６学年	基本的にどの領域もよくできていたが、設問別で分析すると、「農業や水産業」の領域の「日本の主な漁港と水揚げ量」について資料を基に読み取る問題に課題があった。他の資料の読み取り問題は目標値や全国平均を超えていたことから、この単元の知識の定着が不十分と考えられる。ミライシードでの復習や問題演習を通して基礎・基本の定着を図っていく。
第７学年	総じてよくできていたが、公民分野の三権分立や平安時代の文化についての問題がやや下回った。平安時代の学習は２学期以降に学習するので、その際に復習していく。
第８学年	地理分野は、北アメリカ州の知識問題の正答率がやや低かったので基本的な語句の定着をワークなどで行っていく。歴史分野は全体的に低かったので特に７年生の頃に習ったものについては定着プリントやワークで再度定着をはかる必要性がある。
第９学年	地理分野は昨年度の２学期で学習を終えているので、受験へ向けて再度学びなおしが必要だと思う。また、歴史分野も大幅に下回る問題もあったので、朝学習の時間で使用しているワークなどを活用して知識の定着を図っていく。

4.〔全体のまとめ〕

各学年、日々の授業で基礎・基本を定着する活動を導入していく必要がある。ミライシードをはじめとしたICTや S-time のワークなどを使用して基礎基本を確実に定着させていく。

品川区立品川学園

令和８年度　品川区学力定着度調査

第２学年～第４学年における分析と対策　　教科：算数

1.〔調査結果の概要〕

全ての学年において、目標値、全国平均を上回る結果となった。タブレット端末（主にミライシード）や、算数ドリルの活用を通して、反復学習に取り組んでいる成果が表れていると考えられる。しかし、問題別の正答率を見ると、単純な数字の大きさや、単位量など量感に課題が見える結果となった。各学年ともに全国平均と同じか下回る結果になっている。今後も各児童が、個々に学力の定着を図る必要がある。

2.〔各学年における主な分析と解説〕

学年	領域に関わる分析と解説
第２学年	教科の正当率は、目標値、全国平均を上回っている。また、活用問題の正答率は、目標値を８．８％上回っていることから１年生での学習が定着できているといえる。しかし、問題別の正答率を見ると、「１２０までの数」については目標値である８７．５％と同じ数値となった。今後平均を下回る可能性があると考えられる。
第３学年	基礎・活用ともに、目標値、全国平均を上回っている。問題の内容別に見ると、「はこの形」の頂点の数を問う問題が 0.6％下回っていた。面や辺の知識はおおよそ身に付いていると考えられるが、立体を空間的に捉える力が不十分であると考えられる。
第４学年	ほとんど全ての領域において正答率の目標値、全国平均を上回っている。活用問題については、すべての領域で上回った。３年生での基礎的な部分が定着し、活用する力も付いてきたと考えられる。一方で問題の内容別の正答率を見ると、「長さ・重さ」についての問題は正答率 81.4%と、目標値、全国平均を下回る結果となった。

3.〔各学年における主な課題と対策〕

学年	「重点的に指導を行う領域」に関わる分析と解説
第２学年	「１２０までの数」について、数の構成について理解しきれていないと考えられる。授業で１０のまとまりや数の大きさ、数直線などを具体物も活用し、理解が深まるようにしていく。また、授業内でも適宜、復習を行うとともに、家庭学習でドリルを活用し繰り返し演習を行い、学力の定着を図っていく。
第３学年	「はこの形」について、抽象的な概念がまだ頭の中で理解しきれていないと考えられる。授業で具体物の提示や操作活動を多く取り入れたり、日常生活の中で使用したりすることで空間認識能力が備わるようにする。考えを整理する際、図や言葉などを用いて、見えない部分をイメージする力など、様々な視点で理解できるようにする。
第４学年	「長さ」の問題では、「道のり」という言葉を正しく理解できていないために、正答率が低かったと考えられる。3 年生までの学習を振り返るとともに、言葉の意味についても正しく抑えられるようにしていく。また、他にも根拠を問われる場面での説明する力も弱い部分がある。立式の根拠を問うなどして、自分の考えや根拠を表現できる力を養っていく。

4.〔全体のまとめ〕

今後、学習が不十分であった単元においては、S-Time、授業、家庭学習の時間に、各児童が、個々にタブレット端末や算数ドリル・プリントなどを活用しながら、学力の向上や定着を図る。これからも、各児童の学習意欲を高めるために、児童自身が必要感をもって学習に臨めるよう授業力を向上させる。ICT 活用の際には、ミライシードを積極的に利用し AI を活用したり、プリントや課題を作成する際には実態に合わせた問題を用意したりするなど個別最適な学習を展開し、学力の定着を目指す。

品川区立品川学園

令和８年度　品川区学力定着度調査

第５学年～第９学年における分析と対策　　教科：算数・数学

1.〔調査結果の概要〕

多くの学年において、校内正答率が目標値及び全国平均を上回っており、概ね良好な状況である。一方で、区平均を下回る領域や内容が見られる学年もあり、基礎・基本の定着や学習内容の理解をさらに深めるための授業改善が必要である。

2.〔各学年における主な分析と解説〕

学年	領域に関わる分析と解説
第５学年	校内平均正答率はほとんどの領域・内容で、目標値や全国平均を上回っている。特に分数は全国平均を大きく上回る90.8%となった。 一方で「面積」や「平行四辺形の作図」は全国平均より下回った。
第６学年	校内平均正答率は、目標値と全国平均は超えたものの区平均と図形を除く領域別、観点別は超えることができなかった。問題の内容別では「分数と小数」「小数の計算」「分数の計算」「立体と体積」「比例・単位量当たりの大きさ」「割合」「円グラフや帯グラフ・平均」で区平均を下回っている。
第７学年	校内平均正答率は、全ての内容で目標値及び全国平均正答率を上回っている。領域別では「図形」「データの活用」で区平均を下回り、内容別では「文字と式」「面積と体積」「平面図形」「平均・場合の数」「データの活用」で区平均を下回っている。また、「単位量当たりの大きさ」で誤答が再頻出解答となっている。
第８学年	校内正答率は「基礎」「活用」ともに、区の定める目標値や全国正答率を上回った。領域別では「関数」で目標値は上回ったものの全国平均正答率を下回っている。内容別では、「正の数・負の数」「比例・反比例」は目標値は上回った全国平均正答率は下回っている。「１次方程式」は目標値も全国平均正答率も下回っている。
第９学年	校内平均はすべての領域・内容で、区の定める目標値や全国平均を上回った。問題別では、「1次関数」の問題で１問ずつ区の目標値と全国正答率をそれぞれ下回った。

3.〔各学年における主な課題と対策〕

学年	「重点的に指導を行う領域」に関わる分析と解説
第５学年	領域別「図形」に課題が見られた。作図の技能向上を図るとともに、課題が見られる既習事項を、ミライシードを用いて復習する。また、身近なものの面積を推測する経験を積み、作図や計測の技能につなげていく。
第６学年	内容別では「分数の計算」が区の平均を大きく下回り、課題であると言える。家庭学習と連携しながら、既習事項を身に付けさせるようにしていく。課題が見られる既習事項は、ミライシードを用いて復習する。また、東京ベーシックドリルを行い、復習プリントを活用しながら学習を進めていく。
第７学年	正答率が60%を下回っている「百分率」「データの活用」、また誤答が多かった「単位量当たりの大きさ」について、とくに基礎が定着していないと思われる。「文字と式（数量の表し方）」や「方程式（割合）（比例式）」「データの活用」等の単元において、学習内容と関連付けながら復習を行う。習熟度別少人数授業の利点を生かしながら、知識技能に偏らず、考え方を記述したり説明したりする力が伸びる授業を行っていく。
第８学年	「比例・反比例」は８年生の「一次関数」にもつながる内容なので式・表・グラフの関係を相互に関連付けて考えさせたる。「１次方程式」に関しては、８学年の「２次方程式」にも関わっているので、「２次方程式」は既習内容ではあるが、今後も授業に取り入れて学習内容を定着させていく。
第９学年	とくに記述問題において、「図形」分野の「証明の記述」に課題があり、無回答率も高くなっている。習熟度別少人数授業の利点を生かしながら、生徒同士が学び合うことによって思考を深める時間を確保し、説明する力・表現する力を伸ばしていく。

4.〔全体のまとめ〕

算数・数学では、多くの学年で校内平均が目標値や全国平均を上回り、概ね良好な結果であった。一方で、領域や内容によっては区平均を下回る課題も見られたため、継続的な指導改善が必要である。 今後も授業内の活動に加え、S-Time や家庭での学習を通して、基礎力をアップさせていく。また、習熟度別少人数授業での活動やタブレット端末等を用いた対話的な学びを通して、それぞれの学年で挙げられた課題を解決できるよう粘り強く理解を深めていけるよう、学習にさらに力を入れていく。

品川区立品川学園

令和８年度　品川区学力定着度調査

第４学年～第９学年における分析と対策　　教科：理科

1.〔調査結果の概要〕

全体的に見ると目標値に到達している領域が多く見られた。しかし、学年や内容によっては正答率が全国平均より下回る分野もあった。知識の定着が、活用の結果に影響を与えている。基礎的な知識・理解の定着を確認する機会をつくるために、実験や観察の機会を多く提供していく。実験などを通した学習活動でわかったことが知識として定着するような授業展開により、基礎・活用とともに全ての学年でも全国平均を上回ることを目標とする。

2.〔各学年における主な分析と解説〕

学年	領域に関わる分析と解説
第４学年	基礎･活用ともに全国平均を上回っていた。また観点別においても、全国平均を ５ ポイント以上上回っていることから、３年生での学習が定着していると考えられる。身近な事象を大切にした学習が成果につながっていると考えられる。
第５学年	基礎･活用ともに全国平均、区平均と同程度、または少し上回っている。「月と星」、「雨水のゆくえと地面の様子」、「1年間の動物のようす」については、区平均を下回っていた。「生物･地学」分野での知識が定着していないと考えられる。
第６学年	「流れる水のはたらき」に関する問題は区平均を下回っていたが、基礎・活用ともに、目標値・全校平均・区平均を上回っている領域が多くあった。実験・観察を通した体験学習の充実、実験方法の考案や考察の検討での学び合いが、成果として表れたと考えられる。
第７学年	基礎・活用ともに区平均を上回っていた。しかし、「動物の体のつくりとはたらき」については目標値を下回っており、とくに腎臓の働きについては 10.4pt 下回っていた。知識の活用して説明するような問いには無回答者が見られるものの、基礎的な知識は定着していると考えられる。
第８学年	生物・地学分野は目標を上回るものが多く、長文による出題でも内容を理解し、整理して考えられていることがうかがえる。しかし物理・化学分野では全体的に正答率が低い。計算はできているが、数値を活用して考えられなかったり、作図に苦手意識をもったりするが多いと考えられる。
第９学年	「基礎」「活用」ともに区平均・全国平均と同程度。「知識・技能」についてはについては区平均・全国平均を僅かに下回ったが、「思考・判断・表現」では区平均・全国平均を僅かに上回った。問題を読み解く力や思考力はあると考えられる。しかし、基礎的な知識の定着は不十分だと考えられる。

3.〔各学年における主な課題と対策〕

学年	「重点的に指導を行う領域」に関わる分析と解説
第４学年	全国平均と同程度の「身近なしぜんのかんさつ」においては、学習内容の定着を図るために、観察を通した体験学習の充実と多様な見方や考え方ができる授業計画を立てていく。学習を通して、常に自分の生活と自然をつなげて考えられるようにする。
第５学年	基本的な学習内容はある程度は身に付いている。活用する力を高めていくために、実物を観察･実験することや関連したものと比較をすることなど、多様な見方や考え方ができるように授業計画を立てる。生物分野では、実験･観察を通して体験的に学習しながら、力を伸ばしていきたい。物理分野では、実験ができないものも多いので、図や身近な例などを用いて、丁寧に確認しながら力を伸ばしていきたい。
第６学年	実験を行い、結果を推測する問題での誤答が多く見られる。調べたいこと、条件を確認し、結果の見通しもって実験をすることができるようにする。 「知識」、「思考」の問題で大きな差は見られないが、どちらかというと「思考」の問題での正答率が低い。学んだことやわかったことを自分で説明するような時間を設け、学びを深めていく。
第７学年	S-time なども活用して基礎的な知識の定着を図っていく。実験を通して操作の意図や器具の取り扱い、結果の分析を日常的に行い、実験の考察をじっくり考える時間を設けることで、思考・判断・表現する力を伸ばしていきたい。
第８学年	実験や実習で体験を重視するとともに、結果・考察を言語化することで知識の定着を図り、理解度を高めていく。モデルや映像を活用し、概念を具体的にして視覚・聴覚をはたらかせ理解させやすくしながら、授業を展開していく。
第９学年	集団でとらえれば特に得意な領域や苦手な領域があるというわけではないが、各個人では得意な領域と苦手な領域があると考えられる。９学年学習と並行して７・８年次の内容が復習できる学習教材を活用して、今までの既習領域を広く復習させることで、基礎的な知識の定着を図る。

4.〔全体のまとめ〕

全体を通じて、実験や観察で実際に現象を見た内容は概ね理解することができている。しかし、目に見えない現象を概念的に扱う分野の内容の理解ではやや課題が見られた。特に、現象の理由を考察する力にも課題があることから、実験・観察後の考察の場面で、科学的な見方・考え方ができる授業を展開する。また、ワークなどでの演習を通して、知識の定着を図る。

品川区立品川学園

令和８年度　品川区学力定着度調査

第６学年～第９学年における分析と対策　　教科：英語

1.〔調査結果の概要〕

全学年で区の正答率を全体的に上回った。正答率の分布では高得点をとった人数が多くなっている。学習内容の定着度は良好な状況だと判断できる。縦断的な成果の蓄積が明確に確認され、特に小学校段階からの英語カリキュラムの一貫性が中学校での成果につながっていると考察できる。「聞くこと」「読むこと」「書くこと」の全ての領域において区の平均と目標値を上回った。 各学年で「活用」問題の正答率も高く、生徒が既習事項を活用しながら思考し、表現する力を身に付けていることがうかがえる。今後は、言語活動（話すこと）に主体的に参加しようとする態度を育むとともに、小テストや定期考査のみならず、パフォーマンステストなどのコミュニケーションを意識した活動の機会を多く設定し、4 技能のバランスバランスよく育成し、生徒の実践的な英語運用能力のさらなる向上を目指していきたい。

2.〔各学年における主な分析と解説〕

学年	領域に関わる分析と解説
第６学年	６年生英語Ａを見ると、全国平均・区平均を共に大きく上回り、品川の英語カリキュラムの成果が見てわかる。特にアルファベットの読み書きの領域はかなりの正答率であることがわかる。
第７学年	各領域「聞くこと」、「読むこと」、「書くこと」において、それぞれの目標値を大きく上回った。「基礎」問題の正答率は、87.5%となっており、目標値の 76.5%を上回った。また、「活用」問題の正答率は 75.5%で、目標値の 67.5%を上回った。学年全体として、学習内容はおおむね定着できている状況にあると判断できる。
第８学年	各領域「聞くこと」、「読むこと」「書くこと」において、それぞれの目標値を上回った。基礎問題の平均正答率は 62.4%で、目標値の 51.7%を上回った。また、活用問題の平均正答率は 64.9%で、目標値の 48.2%を大きく上回った。８学年全体として学習内容はおおむね定着できている状況にあると判断できる。
第９学年	「聞くこと」については、全体の正答率が70.8%で、目標値57.2%を上回った。「読むこと」については、全体の正答率が66.6%で目標値52.7%を上回った。「書くこと」については、54.8%で目標値43.1%を上回った。学習内容の定着度はおおむね良好な状態であると判断できる。

3.〔各学年における主な課題と対策〕

学年	「重点的に指導を行う領域」に関わる分析と解説
第６学年	観点別において、どの領域も目標値や全国正答率を上回り、学習の定着が見られる。しかし、上回り幅が少ないのは「知識・技能」（聞くこと）の領域の「身近で簡単な事柄についての話の内容理解」や、「思考・判断・表現」（聞くこと）の「日常生活に関する対話の会話内容の理解」に関する問題であった。この内容は日頃から授業での教師の英語発話量を増やすとともに、リスニングなどの活動では、目的・場面・状況を理解・推測しながら、要点をつかみ、会話の内容を理解させることを重点的に指導していく必要がある。
第７学年	観点別において、「知識・技能」「思考・判断・表現」いずれの観点においても目標値を上回った。しかし、領域「書くこと」における問題「英作文」に対する正答率は目標値を超えているものの、領域別の正答率の中では最も低い結果となった。授業中の活動や課題等を通して、すべての学習内容の定着を図り、各領域における力を伸ばしていく必要がある。
第８学年	観点別において、「知識・技能」「思考・判断・表現」どちらの観点においても目標値を上回った。しかし、領域別の「書くこと」における問題の平均正答率は 55.8%で目標値は超えているものの、領域別の正答率の中では最も低い結果となった。授業内におけるライティング活動を充実させることで、目的や場面、状況に応じて適切に英文を書く力の育成を図り、各領域の学力向上につなげていく。
第９学年	観点別において、「知識・技能」「思考・判断・表現」どちらの観点においても目標値を上回った。領域別の「書くこと」については、平均正答率が54.8%で目標値は超えているものの、3領域の中では最も低い結果となった。とくに「場面に応じて書く英作文」は、正答類型に当てはまらない誤答が57.1%と高く、対話の流れや場面を捉えて必要な内容を英文にする段階に課題があると考えられる。授業内でのライティング活動を充実させることにより、目的・場面・状況に応じて英文を書く力の育成を図る。

4.〔全体のまとめ〕

各学年の分析結果から、今回の調査でも学習内容の定着度は良好な状況であると判断できる。特に「聞くこと」「読むこと」の力は十分定着している状況にある。各学年ともに授業の工夫を行い、４技能をバランスよく伸ばす中で「書くこと」の力が付くように、アウトプットの指導を今後増やしていく。次年度の調査では、今回のような良好な状況を維持するとともに、各学年での課題点を少しでも改善できるよう全領域において正答率が目標値を大幅に超えられるように指導を工夫していく。